
HOLSTER 空薬莢

nakaya

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

HOLSTER

空薬莢

【Nコード】

N9081X

【作者名】

nakaya

【あらすじ】

二十一世紀。海面上昇により首都を失った日本国家は解体され、米国、中国、ロシアに分割統治をされていた。そんな時代。市民、住民として弾かれた、ホームレスと呼ばれる者の一人として生きる青年が、存在理由を問われ戦う。

BULLET: 1

新世紀に入ると共に、その国の飢えは加速した。

飽食に慣れきった人々に、我慢、許容などの言葉を耐える強さは無く、等しく貧困が覆い被さると、あっさりと人道主義は放棄された。

東京という名の街が海に沈んで二十年ほどになる。

大きく内陸へと広がった東京湾の一角。

ドブのような裏路地に、一人の少年が生きていた。

「どうした？」

話しかけて来た立派な男に一瞥をくれたものの、少年は、再び目前にある豪邸へと目を戻した。

柵の向こう、緑の芝生の上で、女の子が大きな犬と戯れていた。

「ああいう子が好きなのか？」

女の子の顔が上がった、少年と男に気が付き、少女は家の中へと逃げ込んでいった。

少年の顔が苦渋に歪む、だがすぐに嘲りに変わった。自嘲であった。

娼婦の子として生まれおちた身だった。

保険も無ければ出生届けすら出されていない。

彼は、市民としては数えられる事のない人間であった。

もつともその事に憤りは感じていない。せいぜいが裕福な者を妬む程度で、彼は決して、誰かを憎んだりしてはいなかった。

恨むよりも、盗みを働く方が先であったからだ。

少年は、それでも希望と憧れを持っていた。

この世には、綺麗なものがあるのだと。

自分とは違う、真逆のものがあるのだと。

それは決して、手には入らないし、交わらないし、染まることもできないものだけだ……。

男を振り仰ぐ。

少し腹の出たその男は、禿頭の黒人であった。

「仕事って、なに？」

たどたどしい日本語で、少年は尋ねた。

言葉に不自由なのは、余り人と話す機会が無かったためだろう。

「……いろいろだ」

と男は口にした。

「訓練と教育、仕事はそれからになる……。そうだな、十年もすれば市民権をやるう」

「十年……」

「耐えられるか？」

少年はもう一度豪邸に目をやった。

ギョツと歯を食いしばり、そして何を心に誓ったのか、シャツの胸元を強く握り、引っ張った。

「……やる」

「そうか」

男は目を細めた。

不憫だとも思ったのかも知れない。

首都機能の麻痺した日本は、政府は、国を外国へと売りつけた。

その際に、諸処の事情から市民としての登録を受けられず、あるいは受けることを拒否した人々は、行政府の庇護を受けられないまま、現在も悲惨な日常を送らされていた。

報道では、元は犯罪者であったり、不法入国者が大半を占めていると誘導されていた。だが、単純に心身の都合や事情で期間内に登録をできなかった者たちもいたのだ。

少年の母親は、後者であった。そして身売る以外に道を無くし、そして亡くなった。

当たり前の死に方をした一人となったのである。

そして十年。

少年は青年になっていた。

だが今だドブの中に浸かっていた。

「ジム」

彼、ジムは、唯一の上司であるあの男から、シガレットケースを受け取った。

やたらと大きな橋の上だった。欄干にもたれ、風は寒い。

夜の深まりと共に冷え込みもまた増していた、二人は申し合わせたように襟を立てた。

男は茶系、ジムは黒のコートであった。

「今夜だ。取り引きの内容は、薬が五百キロ。ま、そんなものは警察がどうにかする」

黒い顔をジッポの炎が照らし出す。

元は東京湾を横断する橋であったが、今では海面の上昇に伴って中央部分で水没していた。

陸地側のこの部分は、栈橋のように海の上に浮いている。

けたたましく行き交うバイクとギャラリー達は、この先で行われているチキンレースの観戦者である。

「……で、仕事は？」

切り出すジム、細身で、頬もやたらと痩けていた。

目つきが悪く見えるのはそのせいだろう。

黒髪はべたつき、前髪は顔を隠していた。

「細かいことはケースの中だ」

男はシガレットケースを目で差した。

「やつらは高木首相の長女、真美の誘拐を計画している」

シガレットケースには中折りにされた紙がタバコの下に敷かれていた。

「……首相官邸は街を挟んだ反対側だよな？ 随分と手の込んだ図だな」

紙は首相官邸の見取り図である。

「それだけ今回の誘拐には大きなものがかかってるんだろうさ。で、どうする？」

「どうするもなにも……」

ジムは目を鋭く細めた。

「……俺に話を回すんだ。ただ警備をしろって言うんじゃないんだろ？」

「非法な仕事だからこそ、戸籍のない彼の元へと話が回って来るのだから。」

彼の口元に奇妙な笑みが浮かび上がる。

「……主犯は赤き陽の昇る国だ」

「そうか」

何か思う所でもあるのか、ジムは目を閉じて夜空を仰いだ。

「ジャパンが分割統治されるようになって、何年になると思ってるんだろうな……」

「九十年代に自らの犯した失策を認められん連中だからな。あがいてるのさ……」
「……俺達が政治の話をして仕方があるまい？」

「……それはそうなんだけど、な」

ジムは下向くと、ケースからタバコを一本取り出し啜えた。

男のジッポを借りて火を付ける。

寒さに背中を丸めた二人は、それ以上の言葉は交わさなかった。

テンミニッツ。

住宅街から少し離れて、官邸は山の中腹に建てられていた。

山一つが全て敷地となっており、山道は登り口で検問同然のチェックを受けなければ通れないようになっていた。

しかし今夜半、黒いRV車が無言のままに通り過ぎていった。

内通でもしているのだろうか？ 検問所に詰めている警備員との

疎通は、目配せだけで済まされた。

見とがめる者もない中を、車は奥へ奥へと進んでいく。

電動なのか天然ガスか、とにかくそのタービンのアイドリング音は低く抑えられていた。寝床に着いている住人の耳につくほどではないだろう。

車はそのまま、邸宅の真正面に停車した。

ファイブミニッツ。

正面玄関が開き、中から手招きする影が見て取れた。

ポチャツとした体形、透け気味の服はネグリジェだろうか？

車から黒の工作服で統一した男達が静かに降りた。

二人だ、顔は暗視ゴーグル付きのマスクで覆い隠している。

車に残ったのは一人だけであった。

人影と合わせて三人が屋敷に姿を消す、それを見計らうように、庭との垣根から誰かが車に近付いた。

ウィンドウよりも低く腰を落として、気付かれないように回り込む。そして素早くマフラーに何かを取り付けた。

それはスプレー缶であった、缶から吹き出したガスがマフラーを逆流し、車内を静かに満たして行く。

ずりずりと、車中の男が尻を滑らせ、意識を失う。

不審者を上回る不審人物は、車内をひと目確認してから、屋敷の中へと潜り込んでいった。

今回の一斉検挙は、米国第五十一州、ジャパン始まって以来の大きなものになるはずであった。

湾岸部はパトカーのランプによって、街中以上の賑わいを見せている。

野次馬の半分は、この地区に巣食うホームレスで、残りは事件を

嗅ぎつけたマスコミであつた。

一般人の姿はない。ここは放棄された無法地区なのだ。

「やっぱり変ですよ、部長もそう思いませんか？」

若手の刑事が、上司に問いかけている姿があつた。

「だがなあ……、ヘロインは本物だ」

地盤沈下によつて傾いているビルたち。だが中には真つ直ぐなままのものもあり、そういったビルは、不審者たちの住み処や、倉庫として用いられていた。

「焦るなよムツキ」

若い刑事は舌打ちを発する。

「……ヘロインが幾らあつたつて、捕まえたのが小物だけじゃあ、意味が無いですよ。そうでしょう？」

海の側に逃げられたかなと、二人は視線を投げやる。

そこには満潮のために、海面に没しているビル群があつた。

中には没しきらずに頭を晒しているものもあつたが、まるで墓標であつた。

今日は月がないために、不気味な闇に沈んでいるようだった。

「部長！」

大きな声の呼びかけに、二人はびくんと体を跳ねさせた。

「なんだ！？」

「本部からです！ 首相官邸から警報が出ていると」

理解に伴い、表情が切り替わる。

「シット！ こっちは囧かつ、ムツキ！」

ムツキはとつくに駆け出していた。

屋敷が大きければ、それなりに人の気配は感じにくくなるし、立派な建物ほど足の音も消しやすくなる。

絨毯が立派であるからだ。

深い毛と靴の底の特殊ラバーによつて足音を断ち、侵入者達は気

配を消して進んでいく。

指で合図をし、あらかじめ叩き込んであった間取りを思い出し、目標を探る。

首相は現在本国の会議に出席中、この屋敷には首相夫人と娘、二人だけのはずであった。

つまり、彼らを引き込んだのは、首相夫人である。

夫人は二人を招き入れた後、自分の部屋へと引き上げていった。事件の発覚後、対応などについての内部情報を伝えるように、指示されているからだ。

おおよそ完璧に見える計画だった。しかし既に破綻は見え始めていた。

切られているはずの警報装置は作動していた。ただし作動中を示すランプには黒いビニールテープが貼られ、状態を気付かせないように気が配られていた。

そこかしこにある赤外線センサーは、逐一状況を警察本部へと転送していた。

やがて彼ら二人は、二階にある一つの扉に辿り着いた。

三、二、一、ゴーと指で合図をし、カチャリとノブを回して、一人が入り込む。

その部屋は熊のぬいぐるみなどが飾られている、荒事には似つかわしくない世界であった。

大きめのベッドには、十五・六歳の娘がすやすやと気持ちよさそうに熟睡している。

長い黒髪を持っていた。少なくなった純血の日本人を感じさせる面立ちもしていた。少女趣味が抜け切っていないのか、大きめのピンクのパジャマに、胸にはこれまた大きな熊のぬいぐるみを抱いている。

長女、真美である。

侵入者は真美の鼻先にスプレーを吹き付けた。

「ん……」

寝苦しげに呻きを漏らす、目は覚まさない。

男は真美の体を担ぎ上げると、ドアを出て、仲間の姿を探した。だがそこに共犯者の姿は無かった。

「きゃあああああああ！」

悲鳴が聞こえた。

「あの、バカ！」

舌打ちして、男は慌て、廊下を走った。

「きゃあ、きゃああ！ きゃあああああ！」

男は焦った、何故だか仲間が気絶して転がっていたからだ。

それに錯乱している首相夫人の様子からは、彼女がやったとは思えなかった。

では、誰が？

廊下に月明かりが差し込んでくる。

彼女は闇の向こうにいるものに怯えていた。

月明かりに応じて闇が薄まり、そこに一つの人影が見えた。

闇だと思っていたそれは、暗がりには紛れていた人であった。

それは黒いコートの青年だった。黒いパンツに黒いブーツ。

コートの前がはだけられている、その下のタンクトップのシャツも黒だった。

スラリと抜き放たれるナイフは、ナックルにガードの付いた大物だった。

暗闇の中で鈍く光る。

「ちっ……」

男は真美を担いだままで腰に手を回した。

コートの青年が駆けるように間合いを詰める。首相夫人の脇を抜け、大振りのナイフを横に薙ぐ。

真美を担いでいたために、男は銃を抜くのが遅れてしまった。

ギ、キンと、硬質で耳障りな音が響く。同時にバンと大きな発

砲音も鳴った。

男は狙いを定めるのが間に合わないと思つくと、青年のナイフを銃身で受けて弾いたのだった。だがトリガーに指をかけてしまつていたために、間違えて引き金を弾き、発砲してしまつていた。

跳ね上がった銃口から放たれた弾丸は、天井に小さな穴を穿つて夫人のひきつるような悲鳴を誘う。

閃くように返されたナイフが、真美を担ぐ腕を斬り付ける。

落とされる真美、刃の軌跡に添つて宙に糸を引く鮮血。

流れるように動く青年。脂ぎつた前髪が跳ね、彼の顔をはつきりと見せた。

「ジム！？」

月明かりに見えた顔に、男は驚きの声を上げた。

取り落とした真美を諦めて跳び下がる。

目を細めてジムは身構える。知り合いなのか、知られているのか、思案しているようだった。

ジムは口を開きかけて……、結局つぐんだ。

問いただす必要性を見いだせなかったからだ。

一方で男は、腕を真つ直ぐに伸ばし、銃口をジムにも、夫人にも、どちらにも狙いを定められるように、ふらふらとさせていた。

男は撃つべきかどうか、惑つていた。だが急に点いた電灯の明かりに目が眩み、結局逃げ出す方を選んで身を翻した。

すぐ側の窓を割つて外へと転がる。

ジムはまだ離すまいとする夫人の顔に、後ろポケットに入っていたスプレーを吹き掛けた。

「あ……」

どさりと……、夫人は力を無くして倒れ伏した。

「う……」

交代するように呻きが聞こえた、真美だ。

「……だ、れ？」

落とされた拍子に肩を打ったのか、押さえている。

それでも意識はまだ朦朧としているのだろう。目の焦点が合っていない。

ジムは鼻から息を吐くと、張り詰めていた雰囲気霧散させた。無造作な動作で真美の側に膝をつく。彼は彼女の体を抱き上げて、前髪を掻き上げるように撫でつけてやった。

「う、ん……」

嬉しそうな身悶えをして、真美は体から力を抜いた。不思議と彼の瞳に安堵して。

（おやすみなさい……）

真美はとても穏やかに瞼を閉じる。

「警察だ、動くな！」

ジムは真美を抱いたまま、若い刑事……、銃を構えているムツキへと振り返った。

その目は、元の鋭いものへと戻っていた。

BULLET:1 (後書き)

大昔に書いたものをリメイクしてみています。

この頃は、都市が沈むなんて、海面上昇しかないって思っていました…。

現実には俺の想像を超えてました…。

BULLET:2

翌朝。

「釈放って、なんですか!」

ダンツと振り下ろされた拳に、机の上の書類が崩れ落ちた。

食って掛かって来るムツキに、部長であるロインは書類を拾えと目で命じた。

「……上からの指示だ。ついでに彼は、一連の犯行とは無関係だ」
「なぜそう言えるんです」

ロインは、ぷらぷらと手を振って、追い払おうとした。

「気にするな」

「しますよ!」

ビリビリと声が窓を震わせる。

それ程に苛立つ声は大きかった。

「これだけの事件で、逮捕者がゼロですよ? 奴らまた来ますよ、絶対に!」

「……一人は気絶してたらしいじゃねえか。それを捕まえ損なったのはお前だろ?」

「目の前に凶器を持った怪しい奴が居るんですよ!? 銃を下げられるわけが無いじゃないですか!」

「それで、目え覚ました誘拐犯に蹴り飛ばされたあげく、彼に庇ってもらいましたってか?」

恥辱のためか、ムツキの顔が真っ赤に染まる。

それを横目に、ロインはタバコに火を付け、くゆらせた。

「さっさと行け。お前には令嬢の護衛を命じただろうが」

「なんで誘拐犯の追跡調査じゃないんですか」

「頭を冷やせ……、それだけだ」

「くそ!」

ガン!

蹴飛ばされ、マホガニー製の机に、醜い窪みが刻まれた。

「真美！」

「美幸……」

駆け寄って来る親友に真美はげっそりとした顔をした。
ぱたぱたと小走りに駆け寄って来る。

髪は栗色のシャギー入りショートボブ。

変形セーラー服のスカートが、その勢いに大きく広がっている。
その嬉々とした表情を見て、真美は先手を打って釘を差した。

「……お願いだから、もっと詳しく教えてよ、とか言わないでよね」
「え……？」

「そんな顔してもダメ！ それにほんとに、口止めとかされてるわけじゃないんだから」

「じゃあホントに寝ちゃってたの？」
「ん……、それもはつきりしないのよねえ」

つと二人は校舎から校門までの短い距離を並んで歩いた。
並ぶと二人の背丈は変わらない、平均からも小柄な方だ。
真美は本当に困っているといった顔をして首を傾げた。

「薬で眠らされてたらしくって……」

「お母さんは？」

「ん、まあ……」

その点については、護魔化す様な受け答えしかできなかった。

浮気相手にそそのかされて、実の娘の誘拐事件について、片棒を担いだ、などという話を口に行えるはずがなかった。

（誘拐と言ってもお金と交換で無事に返すからとか、それで浮気のための小遣いが手に入るだとか、考え方がおかしすぎるよ）

はぁと深く溜め息を吐く。

「どしたの？」

心配げな美幸に、真美は愛想笑いを浮かべた。

「ほんとになんでもない……、つていいんだけどねえ」
困ったように校門に目を向けた。

「あれよ、あれ」

「あれって……、ああ、ムツキさん？」

「やつ」

門柱にもたれかかって、待っていたのはムツキであった。

軽く手を挙げて、親しみのある笑顔を見せる。

やたらと真新しいクリーム色のコートを羽織っているのだが、その下のグレーのスーツは酷くよれてしまっていた。

そんなムツキに真美は気色ばんだ様子を見せた。

「暇人が……、犯人はどうしたのよ犯人は」

何も無かったとは言え部屋にまで踏み込まれたのだ。

一番過ごしやすいはずの自室が、いまは気持ちが悪かった。

そんなわけで、真美はかなりささくれ立っていた。

「俺だって捜査がしたいよお……」

そんなお嬢様に、ムツキはがつくりと肩を落とした。美幸が食いつく。

「外されちゃったんですか？」

「どうせ役に立たないからでしょ？」

「違うっつーの！」

地団駄を踏む。

「部長がなにか隠してやがるんだよ！！ それにお嬢さんと顔見知りなのは俺だけだし……」

真美は不機嫌そうに口を尖らせた。

「いつまでも昔のことを……」

「それって……、地下鉄で補導された時の話？」

その時のことを思い出し、真美は顔を赤くした。

「違う！ 上がったり下がったりって、よく分かんないホームを作った公団が悪いのよ！！」

あーっと、美幸は何とも言えない表情をした。

「迷子になったんだ」

東京沈没と呼ばれた二十一世紀初頭の混乱、それは海面上昇に伴う液状化と地盤沈下が主な原因となっていた。

これに対し、水没した路線の廃止と再整備は、対処療法的に行われることとなった。

災害は終息したと、何の根拠も無く口にした政治家によって、最初の計画が強行された。

当然のごとく工事は難航した。大都市沈降現象が、なおも続いていたためである。

着工した後も、浸水は広がっていた。何度も計画の変更や見直しがくり返された。

その結果が真美の口にした、『よく分からないホーム』、を作り上げていた。

複雑な通路に、どこに繋がっているのかわからない階段。慣れないものにはまさに迷路であった。

ムツキは諦めるように慇懃に尋ねた。

「それで、今日はどちらにお出かけですか？」

「……そうねえ」

唇に人差し指を当てていやらしく笑う。

「金づるいるから、美幸い、映画でも見に行かない？」

「え、マジで？」

「ちよ、ちよつと待てよ、俺が払うのか！？」

「いいじゃない、経費で落とせば」

「税金をそんな事に使えるかよ！　って聞けよなあ！？」

「やっぱ特撮よね、特撮」

「え〜？ 『誘拐』、もうやってるからそっちにしようよ」

「……あんたね」

「誘拐されそうになったの真美だし」

「わざとだろ？　わざと無視してるだろ、なあ！？」

必死に喚くが聞き入れられない。

女子高生と歩いているというのに違和感が無いのは、精神年齢が近いかもしれない。

ムツキは二人の耳に聞こえるよう、背中を丸めて訴えた。
「せめて割り勘にしてくれ」

無造作にポップコーンを掴んでは口に放り込んで咀嚼する。

暗い劇場内。映画は今まさにクライマックスを迎えており、逃亡する犯人の車は人質の少女を乗せたままで、峠を鋭く下っていた。

「もう少し静かにしたらどうだ？」

男は……、あの橋の欄干に残った黒人だった。彼は純粹に映画を楽しんでいたのだらう、剣呑な目をジムへと向けた。

「……警察の対応が早過ぎなかったか？ サム」

睨み付けるジム。禿頭の黒人は、大げさに肩をすくめて笑って見せた。

「……今時の警官は、中々仕事熱心だって事だな」

サムはジムの声音に、仕方が無いと映画鑑賞に見切りをつけた。

「悪いとは思っている。だからこうして、身柄を引き取ってやったんじゃないか」

サムの物言いに、今度はジムが中折れた。

「出してくれたのは、ありがたいと思っっているさ……」

ちらりと扉に目を走らせる。

どの非常口にもスーツ姿の男達が居た。

空席があるにも関わらず立ち見をしている。

「……俺のマークは外せないのか？」

「警察も神経質になってるってことさ」

「そんな時に会って良いのか？」

「お前の身元は『不明』だからな。後でまいてしまえば、俺もまた身元不明の不審者さ。問題無い」

サムは皮肉るように笑ってソフト帽を深く被った。

隣の席に置いていたコートを腕にかける。

「出るぞ」

「そうだな……」

ちょうど映画は、エンディングに突入した所であった。

「ダメですよムツキさん。あの男の尾行はこっちに任せるって話でしょ？」

劇場ホールの売店前で、ムツキは同僚に掴まっていた。

「はあ？ なに言ってるんだよ」

突然駆け寄って来た同僚に、きよとした表情を浮かべる。

ムツキはくいつと顎で女の子達を差し示した。

「これも仕事だよ、仕事」

だがそれはそれでまづいことであつたらしい。

「あー！ 保護命令出てるのにこんな所に、知りませんよ！？」

「わっかんねえ奴だなあ……」

ぼりぼりと頭を搔いて、さらに一言言い放とつと口を開く。

しかしムツキは、ちらりと視界に入った男に言葉を飲み込んだ。

上映の終わり間際に戸をくぐって来た人影に見覚えがあつたからだ。

特にその特徴的なコートには……。

「あいつ！」

ムツキは一瞬で頭に血を上らせた。

黒いコートを着ている青年は、確かに昨日捕まえたはずの容疑者であつたのだから。

「ダメですよムツキさん！」

「離せて！」

「あれえ、なにやってんの？」

「あいつだよ、あいつ！」

「へ？」

真美は目を動かして、こちらの騒ぎを遠く見ている二人連れに気がついた。

「あの人？」

「あいつだよつ、お前を拐おうとしたのは！」

「え！？」

最初は驚いた真美だったが、次第にその顔を怒りに赤く膨らませた。

ずんつと大きく歩を踏み出す。

「文句言つて来る！」

これにはけしかけたムツキの方が慌ててしまった。

「ダメですよ、お嬢さん！」

「あれえ？ どしたの？」

両手にポップコーンのカップを持ったまま美幸も後を追った。

「ちよつとあんた！」

その特別に鍛えられた耳で話を盗み聞いていたジムは、溜め息をつきながら彼女に振り返った。

自分の顎先の高さにある目を真つ直ぐに見返す。

「なにか？」

余りにも鋭い視線と抑えた声だった。

「何かじゃないでしょ！？」

だがそれでも真美の勢いは止められなかった。

飛んで来た真美の唾に顔をしかめる。

「あんたたちのせいで家中泥だらけになったのよ？ どうしてくれるの！」

「文句つてそつちのかい……」

ムツキは一瞬でげそつとやつれた。

「なによ！ 警察は警察で荒らしてくし、掃除するの大変だったんだからね！？ おかげで今日は髪洗えなかったんだから！！」

「朝から髪なんか洗わんでもいいだろう……」

「女の子はそうはいかないの！」

いつの間にやら、相手がムツキにすり変わっている。

はっとした真美は、改めてジムに指を突き付けようとした。

「あれえ？ お父さん」

だがのんびりとした声に勢いを削がれてしまった。

「なにしてんの？ こんな所で」

ぽかんとした顔で、気まずそうに背を向けている父に首を傾げる。
そして青年にも。

「ジムも？」

「お久しぶりです」

小首をかしげていた美幸であつたが、徐々になにかを理解したのか、詰問口調で大声を上げた。

「お父さん！ ジムとなにやってたの！！」

「あ、いや……」

気まずげにサムは身をすくめた。

「ジムも！ またお父さんに、たかつたのね！？」

「いえ、そういうわけでは……」

二人は気まずげに視線を漂わせた。

状況に着いていけないのはムツキたちである。

「知り合いなのか？」

こそつと美幸に尋ねるムツキ。

「そっちはお父さん……、こっちは」

美幸はことさらに大げさな嫌悪感を装った。

「ホームレスのおじさん」

「ふえ！？」

ホームレスと言う表現に、真美が反射的な後ずさりを見せた。

BULLET: 3

この時代、ホームレスという言葉は、二十世紀とは違った意味合いで用いられていた。

九十年代、日本は過剰なまでの税政策を敢行し、これにより住居に対する税金のみならず、あらゆる保険への支払い義務を完遂できない者たちが続出した。

彼らは子が生まれたとしても申し出ない道を選んだ。子供の保育の名目で、さらなる税の支払いを強要されてしまったためである。消費税なども導入されたが、これは独身者を増やすだけに留まった。

夫婦一方の収入では家庭を支えられず、かといって共働きでは共に過ごす時間が少なくなり、子の面倒を見る時間もない。

婚姻の意味がそこにはないからであった。よほど独身で居た方が収入に対して余裕を持て、楽しめる。

社会としてはいびつになる一方であった。

そんな九十年代の歪みが祟りとなって、日本は米国を中心とした三国へと身売りする事になったのである。

現在、孤児や私生児、あるいは人間としての最低限の権利でさえ求められずにいる少年少女が、海面上昇によって放棄された水難地区に溢れることとなった。

子供達のほとんどは難民となつて、米本国へ流れるか、あるいは大陸を目指し半島へ渡るか、あるいはここに独自のコミュニティを形成し、汚らしいものを見るような目で敬遠されて過ごしていた。ホームレスとは、こういった者達のことをひとまとめにする別称となっていた。

(でも……)

真美は盗み見るようにして、ジムの瞳を覗いていた。

(この人が守ってくれたんだよね……?)

でも……と、首を傾げる。

憂いと悲しみ、それに諦め。

眠りに落ちる前に見た瞳とは違うことに、真美はどうしてと訝しむ。

「FBIの……、エージェント!？」

「そうだ」

結局、五人はサムの自宅へと移動した。

リビングのソファーにサムとムツキ、真美と美幸の形で向い合うように座っている。

だがジムだけが一人、窓際に立って庭を眺めていた。

中々に広い庭である。

（懐かしそう？）

真美はジムが醸し出している雰囲気、そんな風に感じ取った。

ホームレスを敷地に立ち入らせるだけでも、なんと陰口を叩かれるのか分らないのが世情である。

実際、美幸も、美幸の母も、彼に対しては良い顔をしなかった。

ムツキが居なければ、間違いなく追い出されていたことだろう。

初対面の人間が居るからこそ、自嘲したのだと想像できた。

（だからかな？）

久しぶりに、上がらせてもらえたのかも知れない。

そのために、懐かしさがこみ上げているのかも知れない。

真美は、そんな風に納得をした。

「こいつが!？」

そんな真美の詮索には関係無く、ムツキは刺すような目をジムへと向けていた。

「じゃあ、夕べのは？」

露骨に責める目を作り、ムツキは隣のサムを睨んだ。

「……情報はあった、だからジムに、万が一に備えてもらった」

「うちに断わりもなくですか!？」

「いや、部長には通してある」

「どうしてこつちまで情報が来ないんです！」

「万が一と言っただろう？ 確実でない情報に、警官を割くわけにも行くまい？」

「しかし」

サムは溜め息を吐いて、ムツキの言及を遮った。

「ジム、お嬢さんを送ってくれ」

「室長！」

ムツキはサムへと食い下がった。

「室長はやめてくれ……、FBIと言っても窓際なんだよ」

サムは改めてジムに命じた。

「彼には俺から理解してもらおう。お嬢さんの帰りが遅くなるとまずいからな。頼むぞ？ 美幸、お前はお茶を淹れ直してくれ」

「はあい」

「ジム」

サムは出て行こうとするジムに一声かけた。

「スペンサーだったんだな？」

瞬間、闇の中で対峙した相手の姿が思い浮かんだ。

顔は見えなかった。だが、驚きから発せられた声は、間違いなく知っている男のものだった。

「ああ……」

重苦しく返事をする。

そうか、と、サムは、タバコを取り出し、火を付けた。

バスにでも乗るのかと思った真美であったが、案内されたのは、さほど離れてはいない表通りであった。

「……助手席に乗ってくれ」

ぶつきらばうな物言いにムツとする。

（しょうがないっか……）

だがその憤慨は溜め息と共に吐き捨てた。先に毛嫌いをして噛み

ついたのは自分なのだから、嫌われるのが当たり前と言うものだと納得をする。

だが、ジムは、そんな真美に、気弱な口調で問いかけた。

「何か……、気に障ったか？」

「別にいい」

4WDのラリーカーであつた、色は白だ。

シートもそれ用でとても固く、真美はお尻が上手く座らないのか、もぞもぞと動かして、落ち着く位置を探し出した。

反対側から運転席の扉を開き、入ったジムに、そういえばホームレスだつけど、真美は気になったことを尋ねた。

「……免許って持つてるの？」

「あると思うのか？」

返つて来たのはもつともなお言葉であつた。

そつよねつと呟きながら、シートベルトを閉める。

だからと言って降りるつもりはないというアピールだった。

「行くぞ」

ジムは真美の視線を感じながらも、車を穏やかにスタートさせた。

美幸の家から官邸までは、それなりに距離があつて離れている。

真美は窓から入って来る風に、車も良いなと表情を和らげていた。普段はバスを利用している。首相と言つても選挙で選ばれているだけの人間だ。その娘だからと言つて、たいそうな車で送迎してもらえるわけではない。

彼女の顔は、流れる景色へと向けられている。

だがその目は、ジムを見つめたまま揺るがない。

（やつぱり……、見た事、あるよね？）

小首を傾げて、真美はジムの瞳に焦点を合わせた。

ちらりと横向いた目と視線がぶつかる。

「何か用か？」

ジムの瞳はまた前を向いた。

「……用が無いなら、そう見つめないでくれるか？ 照れる」
キョトンとした後、真美はいきなり吹き出した。

「……そんなにおかしいか？」

「だって……」

「悪かったな……」

ひとしきり笑った後で、真美はふうと力を抜いて口にした。

「ありがと、あの、あなたでしょ？ ……頭撫でてくれたの」

「そうだ」

探るような言葉であつたが、ジムはごくあつさりと肯定した。

真美の顔を見ようとはしなかった。

「ね？ それで……、どうだった？」

真美は俯きながら頬を染めた。

「なにが？」

「もう！ あたしの寝顔に決まってるじゃない！」

プツと頬を膨らませてジムを見る。

（え？）

しかし真美は予想外のものをそこに見付けた。

「あーっ、照れてる！」

「知るか！」

ジムは照れを護魔化するように口元を手で覆った。

引きつる口元を揉みほぐしていた。

「なあに照れてんの？」

そんな年甲斐もない照れに真美はくすくすと笑った。

映画に出て来るエージェントのような、感情を殺している面が見られない。

こんなに素直に顔に出ていて、つとまるのだろうかとおかしくなったのだ。

「もしかして……、女の子抱き上げたの始めて？ 付き合つた事も無いの？」

「ない」

ジムはやや憤然としながらもはつきりと答えた。

「どうしてえ？」

ジムは真美の邪気の無い瞳に、冷めた目をしてこう告げた。

「誰がホームレスのことを好きになつてくれるんだ？」

それきり、言葉は途切れてしまった。

「あ、えっと……」

鋭く切り付けられた台詞の意味に、真美は謝ることすら封じられた。

帰宅——自室。

真美はベッドに倒れ伏すと、枕を手繰り寄せて頭に被った。

朝の努力の成果なのだろう、部屋の床に泥靴の跡は無い。

「失敗したあ……」

ホームレスと言えば、薄汚いという印象があつたのだが、ジムにはそれを感じなかった。

だから油断したのかもしれない。調子に乗りすぎてしまったと思う。軽口にしても、失言だった。

ジムに対しては、生理的な嫌悪感を感じない。

だから、違う存在のように捉えてしまっていた。

普通の人のように思えていた。

だから、普通の人と同じ感性で、言葉の意味を受け取ってもらえると錯覚した。

ジムが自分のことをどう思っているのか、それを考えれば、あれはなかったと思うのだ。

ホームレスを口汚なく言葉にすれば、ジムは同じように傷つくだろう。

FBIのエージェントと言っても、ホームレスとしての自覚の方が強いように見える。

真美は父が首相だから……、と言うわけでもないのだが、噂だけは耳にしていた。

特別な仕事を引き受けて、市民権と戸籍を得るために働いている者達がいるということは。

「ジムが……、そうなんだろうな」

カッコいいと思う反面、やはり先行するイメージがあつた。

——誰が好きになる？

その通りなのだ、現実には真美とてホームレスを『同列の人間』として数えられずにいた。

「でも……」

昨夜の眼差し、あれに惹かれる自分も存在している。

「そっか、あれって……」

（憧れ？）

真美は彼の瞳に浮かんでいたものを、そんな風に解釈した。

慈しみではなかったと思う。憧れているものを見る目だと思つた方が納得できた。

「……ジムって、いくつなんだろう？」

とりあえず、真美は答えの出そうな疑問へと、思考を切り換えることにした。

BULLET: 4

真美が枕を胸に悶え出して十五分。

ジムはまだ、官邸の麓で電柱にもたれかかっていた。

もう陽も落ちてしまっている。

脇にはラリーカーを停めている。

ジャパンは米国の州でありながらも、一国のような形態をもって存続させられていた。

特異な自治区として知られている。

その首都であるこの街は、湾岸部、市街地、そして山が直線上に並んでいた。

なにをするでもなく時間を潰しているように見える。そんなジムに、話しかける姿があった。

「仕事熱心なことだな」

声の源に目を向ける。電灯の下に姿を見せたのはムツキであった。

「彼女の警護は俺の仕事だぜ？」

ふんつと鼻息荒く自分を指差す。

ジムは無視するようにタバコに火を付けた。

「てめっ!？」

思わず掴みかかるムツキであったが、食い込むはずの指は、コートの意外な硬さに押し返された。

厚いのではない。

硬かった。

ジムは、からむなよと、嘆息した。

「警官は街の平和を守っていればいい」

「だったらてめえこそ大人しくしてろ！」

「時間外労働と残業は無駄に税金を消費する」

「だからって、てめえなんかに任せられるか！」

キキイ！　つと、急ブレーキの音がした。

殴りかかろうとしたまま、ムツキは突然の眩しさに目をくらませた。

車のライトだった。二人を照らし、タイヤの音を軋ませたのは、昨日の襲撃者達が乗り逃げて行つた、あの黒いRV車であった。

そのウインドウは開かれていた。

覗いていた筒を見て、二人はとつさに、ラリーカーの影に飛び込んだ。

連続した発砲音が鳴り響く。

ボンネットに、扉に、窓に銃弾が弾けて穴を穿つ。

「この！」

二人はまるで申し合わせたかの様に、同じ動作で銃を抜いた。

揃えるように並んで屋根の上で狙いを定める。ムツキの銃は支給品だったが、ジムのものは大口径のマグナムであった。

ガン、ガオン！

ムツキの銃の音は、マグナムの轟音に飲み込まれ、かき消される。

「くっ！」

走り去る車に舌打ちして、ジムは穴だらけになった車に乗り込んだ。

「ちっ！」

ムツキも助手席へと飛び込む。

割れた窓ガラスの破片が尻に痛かった。

——キキュ！

タイヤを軋ませて、車はターンをする。

銃を握ったままハンドルを操る動きに慣れを見て、ムツキはぶすつと口を尖らせた。

「そのマグナム、携帯許可はあるのか？」

「ない」

「この車は？」

「スクラップから組み上げた」

銃撃戦になるかも知れない。だからシートベルトはかけられない。

ムツキは足をダッシュボードに押し付けて体を固定し、ジムの鋭い目を盗み見た。

（まるつきり、法を無視してやがる。こいつ……）

あるいは法というものを知らないのか、守るべき理由を持たないのか？

そんな考えが、ムツキにジムの生い立ちを想像させた。

「あいつは昨日の残りか？」

「だろうな」

ジムの目はガソリンの残量に向けられていた。

まだ走り出して間もないのだが、ホームレスのジムである。ガソリンはいつも尽きる寸前だった。

ムツキも気がつく。

「……やばいのか？」

「向こうは電気駆動との両用らしい……、燃費を考えても」

「なら無理矢理でも停めるしかないな、右に出られるか？」

「やってみよう」

ジムはさらにペダルを踏んだ、過給器が大きく悲鳴を上げる。

いくら夜の都市外縁部とはいえ、街中であることには変わりはない。

深夜でも無いので交通量も少なくは無かった。

当然、追跡行は先を走るRV車が、一般車両を割って進むことになる。

それに対して、追いかける側は楽なものであった。先行が空けた道に割り込めばいいだけなのだから。

ジムはそれを読んだ上で急加速をかけた、一気に間を詰め、右車線から左に切り換えようとしたRV車のテールをノーズで小突いた。RVは後部を滑らせて安定性を失った。

その立て直しに手間取っている間に、ジムは間隣、右車線を占領して見せた。

「このっ！」

ムツキは小さなりボルバーをタイヤへ構えた。弾層に込めていた六発全部をそこへ撃ちこむ、路面やフェンダーへ逸れたものの、五発目だけが何とか意図した通りにタイヤに当たってバーストを招いた。

キキユツ！　　つという音。ゴン！　　つと衝突音。

安定性を欠いたRV車は、歩道側の常緑樹へと突っ込んだ。ジムがブレーキを踏む。元々タイヤのグリップ力が足りていなかったのか、滑るように横に向いて停車した。

「死んでないだろうな！」

ムツキは、自分でやっていながら、舌打ちした。

ボンネットが折れ曲がり、木がエンジンルームの半ばにまでめり込んでいる。

二人は車を止め、警戒しながら中から降りた。暫く様子を見る。しかしなんの動きもない。

頷き合ってから、二人は姿勢を低くして近寄った。

——官邸。

「バカモンがつ！」

怒声が落ちた。

雷にも匹敵する罵声でもあった。

「お前達の仕事はお嬢様の護衛だろう、何をしていたっ！」

「しかしですねぇ！？」

「俺のミスだ」

ロインとサムの怒りに対し、ムツキとジムは対照的なまでに違う態度を見せていた。

犯人を捕まえて官邸に戻って来た二人を出迎えたのは、官邸につめかけている警官隊であった。

「いきなり撃つて来たんですよ？　野放しにしておけますか！」

「どうしてお前はそう気が短いんだ！」

黄色いテープが張られ、赤色燈がいくつも回転している。

ジムはギリッと唇を噛んだ。

「……ミスは取り返す」

「当たり前だ」

そう言ったのはサムである。

ムツキ達を置いて、ジムとサムは少し離れた。

「美幸が何か知ってるそうだ」

「わかった」

「おい、ちよつと待てよ！」

置いていくなとスがるムツキを、ロインが捕まえる。

「お前はダメだ」

「なんでだよ！」

しばし睨み合うムツキとロイン。

バックではパトライトが目を痛くさせている。

「……警官だと言うことを思い出せ」

ロインが搾り出した言葉はそれだけであつたが、ムツキにはなによりも効く言葉であつた。

そんな彼らを置き去りにして、ジムとサムは、サムの車へと歩み寄つた。

「美幸」

「ジム！」

サムの車の中で小さく震えていた美幸は、戸を開けて話しかけて来たジムの首にしがみついた。

「どうした？」

そんな彼女の背をなでつける。

互いに、昼間とは百八十度態度が違つていた。

美幸はジムに信頼を見せ、ジムは美幸を慈しむように抱きしめる。

「真美が、真美が……」

「わかつてる。俺のミスだ」

髪を擦り付けるように首を振る美幸。

「真美、ジムに謝りたいって言って……」

「謝る？ なにを……」

心当たりがなく、ジムは怪訝そうに首を傾げた。

「……ホームレスだからって、恐がっちゃったって、電話で」

「ああ……」

納得と苦笑を同時に漏らす。

「美幸こそ……、こんな所を見られたらまずいだろ？」

「うん……」

美幸は惜しげに体を離れた。

目は涙で赤くなってしまうていた。

そしてその顔は、再び泣き出す寸前であった。

BULLET:5

低く唸るように、エンジンの震動が体に響く。

真美は、両手首、両足首をガムテープで縛られ、その上でシートベルトによって固定されていた。

「むうー！ー！」

訴えてはみるものの、口を塞いでいるガムテープが邪魔で、くぐもった呻きを漏らすことが精一杯であった。

不格好に固定されてしまっているためか、真美は強ばる体をむずがった。

身じろぎをしてみるのだが、ベルトが食い込み、痛みが増したただけであった。

そんな様子に、誘拐犯が声をかける。

「悪いな。静かにしてくれるなら、口だけは勘弁してやるよ……、どうだ？」

真美は誘拐犯を見た。

そして気がつく。

（このコート……、ジムと同じ？）

熟考の末、真美は頷いた。

コートの色は白った。色違いであるが、サイズのわりに厚みがある所もそっくりだった。

男は苦笑しながら、真美の口に手を伸ばした。

ハンドルを操りながら、べりつと剥がす。

「ぷはっ……」

（臭い……）

勢い込んで吸い込んだエアコンの風に顔をしかめる。

「不安か？」

その様子を、男は勘違いして尋ねた。

「殺しはしない……予定だが、とりあえず餌にはなってもらっ」

「餌？」

「ジムの」

「ジム？」

真美はキョトンとした。

この誘拐は、父親に関するものの続きだと思っていたからだ。

「知らない……、とは言わせない」

それまでは、多少なりとも柔らかかった瞳が鋭くなって、真美を射貫いた。

親しいと、なにか勘違いされているのだと思い至る。

「知ってる……、けど」

躊躇しながらも、おずおずと尋ねる。

「誘拐……、じゃなかったの？」

「ふん」

鼻で笑われた。

「その計画ならおじやんさ」

トンツと、ハンドルの上で人差し指が跳ねた。

「おかげでもっとヤバい計画が動いてる……。ま、自業自得だと諦めてくれ」

（どういう意味？）

計画について訝しむが、危険な香りを敏感に察して、尋ねることはしなかった。

「ジムは……」

だがそれでも、彼の事だけは気になり、知ろうとする。

真美の足は震えていた。

「どうして、ジムを？」

「知りたいか？」

男はうすら笑いを浮かべて真美を見た。

「じゃあ電話をしている途中で、彼女は襲われたんだな？」

ジムは確認するように美幸に尋ねた。

サムの手はどこにでもあるような白の自家用車で、とくに改造は施されていない。

ドアを閉じて二人きり、ジムは話の内容を外へと漏らさないように気をつけていた。

下手に警察に動かれては困るからだ。

「美幸の悲鳴が聞こえて……、その後に、スペンサーって人がジムに伝えろって」

「スペンサーか」

ジムは噛み締めるように呟いた。

「知ってるの？」

「まあ……」

苦いものを思いしたのか、ジムの柳眉が醜く歪む。

「あいつはな……、スパイだったんだよ」

スペンサーは車を止めて、激情を吐き出すようにハンドルに突っ伏し、語り始めた。

そうでもしなければ事故りそうだったからである。

声が激情によって震えていた。とても運転できる有り様では無かった。

「あの頃……、俺は組織でもそれなりのところに居たんだ」

スペンサーは憤怒に顔を歪ませながら語っていた。

ジムとの間に芽生えた友情、そしてボスの正体について口を滑らせた時のことを。

——それはどこかの裏路地だった。

倒壊したビルの、残された壁には、『HOPE!』と赤い文字が書き殴られていた。

二人はその壁にもたれて、ちびたタバコを吹かしていた。

揃いであつらえたお互いのコートは、異臭を放つまでに汚れてい

る。

黒は白くすすけ、白は黒く染まっていた。

色違いの灰色。それでも二人の顔には、笑顔があった。

「親友だと思ってた！ 俺は次のヤマが終われば市民になれるはずだったんだ！ そうなったらお前にも屋根を貸してやるっ、あいつもそうなりやいいって喜んでたのによっ！ なのに！」

怒りに顔が歪んだ。

「ボスは……、そりゃあ汚い事をしたさ。そうしなきゃ市民になれなかったからな。そうやって市民になった人だった。そうやりや人間になれるんだってやってみせてくれた人だった……俺たちの希望だったんだ。わかるか？ わからねえだろうな……、ボスのお嬢さんだってわからなかったろうな……」

声が落ちついて低く抑えられていく。その分、圧力が込められて高ぶりが増していた。

当時その女の子は五歳、小学一年生だった。

「あいつはな！ お嬢さんの鞆に爆弾を仕込んだんだよ！ なんにも知らねえ、わかりもしねえ、お嬢さんの鞆によお！」

ごく普通の住宅地にある、ごく普通の邸宅が、突如として昼日中に吹き飛んだのだ。

「それだけじゃねえ！ 組織に入ってから三年間、あいつは、あいつはな！？ 俺達の仲間を殺して回ってやがったんだよ！」

ある時は一仕事終えた逃亡中に、安心し切った所をナイフで喉を。またある時は市民に紛れて、食事中の所を狙撃して。

「仕事だけじゃねえっ、アジトの情報まで流して……、そうやって自分一人が市民になろうとしてやがったんだよ、同じホームレスのくせによおっ！」

それが工作員であると言うことなのだろうと、真美はなんとなく想像ができた。

「は、はは……、ボスの事を漏らしたおかげで、俺も危なくなっただけ？ ヤバい仕事ばかり引き受けて来たさ……、今度は首相を脅そ

うって計画だった。これで俺はもう一度やり直せるはずだった！
なのになあいつだ！！」

（ひっ！）

ダンッとハンドルに叩きつけられた拳に身をすくませる。

「あいつを殺す」

スペンサーは呪詛を吐くように宣言した。

「それで何もかも清算してやる」

（狂ってる）

タベ見た、ジムのものとはまるで正反対の瞳に真美は脅えた。

そこには優しさなどかけらも見えない、あまりにも何もかもがジムとは違っている男であった。

（ジム！）

真美は恐さから、ギョツと目を閉じた。

スペンサーに語られたジムの像よりも、彼女は自分の瞳に映ったものを信じていた。

BULLET: 6

「ここ、か……」

美幸へと残されたスペンサーの伝言に従い、ジムは隣県との境になっっている、山中へと車を乗り入れた。

州でありながら、その中には都道府県があり、幾つかは日本のような横文字や、他国語の名称へと変更を受けている。

一国が、戦争ではない形で消失したことへの混乱が、そのような部分に現れていた。

強制や、圧力による統治という形が取られず、民主的な配慮がなされたために、このような混沌を招いてしまっていた。

鉄道線路の上に立つ。もうすぐ始発がやって来るだろう、朝もやの中で、ジムは敷き詰められている砂利と枕木を踏んで進んでいく。
「ジム！」

霧の向こうに真美がいた、パイプ椅子の背にテープで括られて座らされていた。

暴れる度にガタガタと椅子は激しく揺れる。

彼女の顔に浮かんでいる不安と安堵に、ジムは頬を引き締めた。

「よう、ジム」

その隣には彼もいた。ジムはゆっくりと脇の下から銃を抜いた。

「スペンサー……」

「おっと、これが何か……わかるかな？」

おどけるように、真美の足元を爪先で示した。

テープでまとめられた足首の真横、椅子の足に何か別のものが巻き付けられている。

「C4か……」

「そう、で、起爆装置はここだ」

左手を挙げる。

「このスイッチを離せば十五分でドカンだ」

「十五分？」

「そうだ。長いだろ？ チャンスをやるよ」

タン！ と、ジムの足元で銃弾が跳ねた。

「チャンスだと？」

スペンサーの右手にある銃を、剣呑に見やる。

スペンサーはその銃口を揺らして見せた。

「面白いだろう？ 政府の犬と敵が、同じ市民権つてえ餌に釣られて争うんだ。もっとも」

揺らしていた銃口を、ジムの眉間へとぴたりと合わせる。

「俺はもう、市民にはなれないだろうけどな？」

引き金が引かれるよりも一瞬早く、ジムは右へと跳んでいた。

美幸は、行かせて良かったのかと悩んでいた。

だが他に頼ることもできなかった。

（ジム……）

父の隣で、車中で、美幸はジムとの会話を回想する。

——あたしのママも、ホームレスだったけど。

「詳しく話したこと、なかったよね？」

おどおど脅えた目を向けると、ジムが優しい目をして、先を促していた。

美幸の母親は、サムの妻ではない。

別の人間であつたし、父親もまた違っていた。

サムの一家と美幸とは、血が繋がっていなかった。

その屋根無しの親子は、雨が降ってもずぶ濡れになって過ごしていた。

母を見上げる娘は、悪寒を堪えて唇を真っ青にしてふるわせていた。が、それは母親も同じであつたし、どうしようもない事柄でもあつたのだ。

軒先を借りることさえ許されずに、二人は薄汚れた服を着て歩い

ていた。

その服は、死んだホームレスからの租借品である。自分たちが死んだ時には、剥ぎ取られ、また別の誰かの手に渡るのであるものであった。

その街は、そうした形が当たり前の事柄であった。

「でも、それをパパが拾ってくれた……」

美幸は、まるでこれまでの態度を償うように、告白を続けた。

『ヘイ!』

ジャパン支部に派遣され、サムが見たのは、本国のスラムよりも酷い世界であった。

排他的なジャパンという州は、前世紀の政策による被害者である彼らを、救うどころか、ただ生活圏から追い立て、追い出し、清潔に『清掃』するだけの方策を推し奨めていたのだった。

そこには、人道的な見地など存在してはいなかった。

そうやって、危険地帯として封鎖された区域へと追いやられていった者たちは、病や、飢えや、苦しみのために狂うか、壊れるか、死んで行く。

「あんまり気持ちのいいものじゃなかったよ」

「サム……」

「コーヒー、飲むだろ？」

運転席に乗り込んで、サムは二人それぞれにカップを渡した。

美幸はジムの胸に擦り寄ったままで、両手でカップを受け取った。

「暖かいね……」

「ああ……」

美幸の呟きに答えたのはサムだった。

「……俺がライトを当てながら近寄るとな？ 美佐子が……、美幸の母親なんだが、飛び掛かって来たんだよ、逃げろって叫びながらな？」

土砂降りの雨の中、サムは美佐子に組み倒されて、どうしたらいいものか慌てたと言った。

痩せこけた女の何処に、これほどの力があるのかと、疑うような
気迫であったが……跳ねのけるのは簡単だった。だが、それをため
らわせるものがあつたのだ。

細過ぎる腕が、あっさりと折れてしまいそうで恐かつたのだと言
う。

サムは首を締められても、結局は耐えたという。
握力のなさを、哀れむ余裕もあつたというのだ。

それほどに美幸の実母はやせ衰えていた。

「それで？」

「大荒れさ」

肩をすくめる。

「美佐子は話を聞ききやしないし、美幸は泣き喚いて動こうとしな
いし」

「……で、引き取つたのか」

「ああ、美佐子は無理だつたが……」

「ああ……」

気がつけば美幸の体が震え始めていた。

コーヒーが縁からこぼれる。跳ねたものが、ジムのシャツに染み
を作る。

ジムは腰に腕を回して抱き寄せた。

寒気を打ち払えるよう、体をさすって温めてやる。

それはまるで、妹に、血を別けた肉親に対して、接しているよう
であつた。

「『美幸』……、か」

ビクリと、『美幸』を名乗っていた少女が脅えた。

「……もう死んだものだと思ってるよ、行方不明になって十年だ」
美幸とは、サムの実子の名前であつて、それは彼女の本名ではな
かつた。

行方不明となっている『美幸』の戸籍は、現在は彼女のために用
いられている。

「恐いの……」

今、ここに居る美幸は、一層震えた。

「真美……、あたしを親友だって言ってくれてるけど、あたし、パパの子供だってふりをして……、バレたらどうなるのかって、それを考えると」

何も言えない、言えるはずが無かった。

消息不明の女の子の戸籍を借りている偽りの存在などと、どうして告白できるだろうか？

美幸の正体は、市民のふりをして紛れ込んでいる、ホームレスである。

これは重罪であった。ジャパンにおいて、ホームレスに市民権は与えられていない。

不法滞在者であり、人権は認められていないのだ。

そんな存在が、成り代わりを演じて、市民権を悪用していることになるのだから。

美幸は、だからこそ、ホームレスに共感を抱いたり、近寄ってはならないのだと、自分を戒めていた。

決して気付かれてはならない、悟られてはならないことであるから……。だから、表向き、美幸は過剰なまでにジムを嫌って見せていたのである。

心ですまないと、詫びながら。

蔑みの言葉が、全て自分にも当てはまるものと、傷つきながら。

「やめてえ！」

悲鳴を上げる真美の前で、二本のナイフが甲高い音をぶつけ合った。

アーミーナイフを逆手に持つスペンサーと、ナックル付きのコンバットナイフを絶えず繰り出すジム。

お互いの顔には、異常なまでの憎悪が張り付いていた。

スペンサーは殴りつけるついでのように振るい、ジムのコートの胸を裂いた。

「くう！」

ジムもまた一步下がりがながら、下から上へと斬り上げた。

ビーツと、スペンサーのコートに裂け目が生まれる。

「ふっ、あ！」

それでも、恐れもしないで、スペンサーは間合いを詰めて蹴りを放った。不安定な状態で受け止めたジムは、派手に砂利の上を転がされることとなった。

「お前もっ！」

一回転して起き上がるジムに、スペンサーはボールを飛ばすような蹴りを放った。

「俺と落ちろ！」

ジムは脇に引いていたナイフを突き出した。

スペンサーの足に細い筋が入り、直後にぱっくりと切れて血が溢れ出した。

真美は泣きじゃくり、叫んだ。

「どうしてそんなに市民になりたいの！？ おかしいわよ！」

自分にとって当たり前のこと、それが殺し合いを演じてまで奪い合わなければならないのだと、真美には理解できなかった。

スペンサーはそんなお嬢様に簡潔に答えた。

「『市民』じゃなきゃ、『人間』じゃないからだよっ、なあ、ジム！」

血が流れたぐらいでは怯まない、斬られた瞬間は熱くとも、銃で撃たれたわけではないのだから。

それ程には、痛みもショックも来はしない。

二人はその程度の痛みに堪えるだけの精神力を持ち合わせていた。持たなければ生きて来れなかった。彼らにとって、この程度は慣れていて当然のものであった。

「教えてやれよ！ 俺達は……、ゴキブリやドブネズミよりも惨め

に生きて来たってなあ！」

二人のナイフは閃き合った、その様な環境で培われて来た精神は、痛みなど無視できるようなものだという、特異な認識を与えていた。切っ先が触れ合う度に生理的な嫌悪感をもよおす硬質な音が響き出る。

ジムは目の前の狂気に集中しながらも、心でスペンサーに応えていた。

（そうだ、俺も懂れていたよ……）

ナイフの煌めきの中に、様々な記憶が垣間見えた。初めてサムに会った日のことが。

サムが、結婚したと指輪を見せてくれた時の驚きが。

娘が生まれたと、だらしなく目尻を下げた喜びの表情が。

誘拐された時の号泣、嘆きと悲しみと、崩れ落ちている夫婦の姿が。

（すまない、サム！）

ジムはサムの娘の行方を知っていた。

他ならぬ彼女を見付けたのはジムだったからだ。

貯水層の中で、ガスによって膨れ上がっていた。

ウジも沸いていた。

目玉から口から虫が沸いていた、耳からもこぼれていた。

それでもその顔を見た時に、ジムにはその子が『美幸』であるとわかってしまった。

例え認めたくなかったとしてもだ。

FBIに対する見せしめの行為であった。そのためにサムの娘は狙われたのだ。

変わり果てた彼女を抱きしめた時に、ジムの中で何かが切れた。壊れて、砕けた。

計画の首謀者をつきとめたジムは、同じ苦しみを味合わせるために……。

（自業自得だ）

その男の子供も、関係の無い存在であった。だがそれがどうしたというのだろうか？

子供の鞆に爆弾を忍び込ませ、その日、そのごく普通の家庭を、ジャパンから永遠に消し去った。

『美幸』の仇を討つために。

そして、それからジムは、ひたすら人殺しを続けて来た。

終わりなど、いつしか気にしなくなっていた。

市民などという夢も見なくなっていた。

大切な何かが失われたから。

壊されたから。

腕に熱く焼けるような痛みが走った、血も滲む。

痛みが現実へと引き戻す。

それさえもジムは怒りに変えた。

記憶を蘇らせることさえ許さないのかと。

（お前らがくり返すから！）

ジムは氣力をさらに高ぶらせていった。

BULLET:7

「くっ、う！」

自在に繰り出されるナイフをかるうじて避け、ジムはお返しとばかりにスペンサーの頬を浅く裂いた。

朝日に、鮮烈に血が光る。

「そんなに市民になりたいのなら、お父さんをお願いしてあげるからあ！」

泣き叫びが霧を散らすように辺りに響いた。

真美は……頬を、腕を、足を、撫でるように裂かれ、血でまみれた男達に恐怖していた。

一つの傷ができる度に、痛みを想像してすくみ上がってしまっていた。

そんな真美を肩越しに見て、スペンサーは「ははっ！」と笑った。

「聞いたか？ 市民にしてくれるんだとさ！」

「ああ！」

ナイフを繰り出すと見せての左拳にジムはよろけた。

「国が、……俺達を捨てやがった国がくれなかったものを、お嬢さんが『パパ』にお願ひしてくれるんだとさ、ふざけるなあ！」

ナイフを順手に持ち変える。

「税金が払えなきや市民じゃねえ！ 保証もなんにもしてくれねえっ、助けてもくれなかった奴らが、首相令嬢の『お願い』を聞いてくれるわけねえだろうが！」

突き出されたナイフがジムの左腕を深くえぐった。

（動脈、切れたか！？）

吹き出した血に焦るが、ジムは考え過ぎだとねじ伏せた。

「自分の男と、母親の男と、どっちが勝つかよく見てろ！」

（耳鳴りがしやがる……）

ジムは、それも気のせいだと思つことにした、が……。

（違う！）

ジムは、はつとスペンサーの、さらには真美の背後に目をやった。

「始発か！？」

「え！？」

ジムの声に背後に顔を向ける真美。

「嫌だ、ちよつとお！」

ガタガタと椅子を揺らして逃げようとするのだが……。

「きゃ！」

その場で倒れてしまった。

「嫌あ！」

電車が迫つて来る。耳鳴りの正体は列車の発する音だった。機関員は線路上の『物体』に気がついていない。

まだ、霧が晴れきつておらず、見えていなかった。

（轢かれる！）

真美はギュツと目を閉じた。

「真美！」

ぐいつと引かれる感じ、間一髪、転がった脇を列車が駆け抜けていった。

真美は、何故、どうしてと、目を丸くして、自分を引っ張ってくれた恩人に驚いていた。

「美幸！？」

「よかった、間に合つて……」

ふうつと息をつく。

「くっ！」

「ジム！」

美幸の叫びにハツとする。

「ジム！」

ジムは左手でナイフを払いのけていた。

切られた腕は上手く動かず、盾の代わりに振り回すしかなかった

ようだ。

——ゴッ！

さらに、体勢の崩れたスペンサーの頬を、ナイフのナックルで殴り付けもした。

——ゴォン！

爆風が、真美を、美幸を、ジムを、そしてスペンサーを吹き飛ばした。

（もう十五分経ったのか！？）

ジムは焦りを交えて、真美と美幸の姿を探した。

煙のわりには炎が少ない。それは正しく、爆発したのは真美の椅子のものと別爆発物であった。

はっとする。

「スペンサー！」

吠える。

姿が消えていた。車の走行音が遠ざかっていく。

爆発したのは、ただの煙幕弾だった。

「……逃げる気か？」

「ジム！」

車が線路に乗り上げて来た。

ウィンドウを開き、サムが叫ぶ。

「乗れ！」

「ああっ！」

「あ、置いてかないで！」

ジムは行きかけて、慌てて真美の元へと駆け戻り、血まみれのナイフで拘束テープを切り裂いた。

「大丈夫か？」

「ああ」

運転は任せて、ジムはコートを脱いで丸めた。

ひとつ、背後で二つほど小さい悲鳴が上がったが、気にしている
余裕は無い。

左腕半ばから、血がじわりと滲み出している。

「深いな？」

眉をひそめて、サムが尋ねる。

「血管は？」

「いける、切れてない」

指を使って傷口広げ、確認し、ジムは信じられないような行動に出た。

「やだ!？」

二人の少女は目を閉じた。

じゅっと、嫌な音がした、次いで肉の焼ける香りが鼻孔をくすぐる。

カーライターを押し当てて傷口を焼いて溶接したのだ。

車内に嫌な匂いが充満する、うげっと真美と美幸は口を押さえて窓を開けた。

ルームミラーで、えずく子供たちに顔をしかめ、隣の男に自重しろという。

「……派手に動くとまた開くぞ？」

「その前になんとかする」

わかっていて焼いたとは言え、熱くなかったわけではない。

頬が引きつって上手くは喋れないようだった。

「無理をするな、お嬢さんは取り戻したんだ」

「だめだ」

ジムは首を振った。

さらに脇のホルスターから銃を抜く。

「ここで逃がせば、あいつは何度でもやって来る」

決意を孕んだ言葉に、真美は弾ける様に顔を上げた。

「ねえ？ どうしてそんなに市民になりたいの!？」

美幸に縋り付いて泣きながら尋ねる。

「今だつてみんなと一緒にでしょ？ お店に入つて、普通にご飯を食べて、ねえ？ どうして市民になりたいの！」

ぎゅつと……、力が籠った。

美幸の腕に。

「美幸？」

抱く腕に込められた力に、真美は美幸の顔を見上げた。

そこには、真美の知らない美幸が居た。

酷く辛そうに唇を引き結ぶ、知らない女の子の顔があつた。

「……誰も、守ってくれないもの」

「え？」

くぐもつた声には、やけに実感が籠っていた。

「……殴られようと、犯されようと、死んでも、生ゴミ扱い。それがわたしたち、ホームレスよ」

「美幸？」

（わたしたち？）

真美は美幸の話を理解できなかった。

まさか、美幸の正体が、ホームレスの女の子だと、想像もしていなかったからである。

「ホームレスにはね？ 人権が無いの」
ぽたぽたと……。

真美の手に雫が落ちて来た。

「美幸……、泣いてるの？」

美幸の目元を拭つてやる。

その手を、美幸ははね除けた。

「人殺しになつても百倍もマシなのよ、市民つて！」
サムは、困惑している真美に暴露した。

「美幸はホームレスの女の子なんだよ……俺の子じゃない」
「サムおじさん？」

過多の情報に、真美の頭はこんがらがってしまっていた。

「美幸が……、ホームレス？」

だつて、と、サムを見る。

「俺が拾つて、行方不明になつた娘の代わりにした」

「代わり？」

「……そんなもんだよ。人口だけが過剰で、物価が高く、だが就労場所を提供できない。しかし本国政府の期待に応えるためには、多大な税収入を確保しなければならない。金満国家の伝説を当てにして、アメリカは日本を買い取つたんだからな？ ジャパンはそれに応える義務があるのさ。それがジャパンなんだ、わかるか？」

真美は青い顔をして首をフルフルと振つた。

「……わかれよ。税金と保険料、その他、金を収められるやつだけが人間なんだ。金づるとして存在意義を認められてるだけなんだよだから、金払いのいい連中を……『市民』を養うのが精一杯で、それ以外を救つてやつてる余裕なんてない。それがジャパンって州の正体だ」

「パパ……」

苦渋を浮かべるサムに、美幸も胸の痛むような声を漏らした。

「……だがな？」

一転、サムは安心させる様に声を和らげた。

「俺は美幸を……、『加奈子』と呼べなくても、美幸の代わりなんかじゃない、俺の娘だと思つてる」

「うん……」

美幸は顔を伏せるように、前席の背に額を押し付けた。

「美幸……、泣かないで」

ぽたぽたと滴が跳ねる。

真美は見えていられなくて、美幸の背をそつと撫でた。

「お前も……、もういいんじゃないのか？」

そんな二人をルームミラー越しに微笑んでから、サムはジムへと話を振つた。

「……俺はもういいんだ。美幸だつてこんなことを望んじやいない」「それを決めるのは俺だ」

「俺が知らないとも思ってるのか？」

一瞬、空白の時間が生じた。

「美幸……、お前が見付けて、埋めたんだろう？」

車内が沈黙で満たされた。

「知ってたのか？」

「やっぱりか……」

ジムはちつと舌打ちして、顔を背けた。

「わかつてはいたさ……、あれほど殺しを避けていたお前が、突然……、おかしいってな」

「そうか」

話しながらも準備は進める、ジムは血糊の付いたナイフをコート
の裾で拭いた。輝きを確認する。

そこに映るサムは顔をしかめていた。

「美幸はもう帰って来ない、それが事実だ」

「わかつているさ」

「わかつてないだろう？」

サムは剣呑な目を向ける。

「美幸が本当に、お前がそんな風になることを望んでると思ってる
のか？」

ピタリと……。

サムの喉元に、ジムの持つ白刃が当てられた。

堪えきれずに漏れ出す殺気が、黙れと、何よりも雄弁に物語って
いた。

「……遠足を楽しみにして、弁当箱を買って、……許せるわけがな
いだろう？」

初めての遠足だと、小学校に入っただけで、はしゃいでいた。

「お前が殺し屋になって喜ぶと思ったのか？」

「望んでないのはあんただろう」

ジムは刃を当てたままで吐き捨てた。

「人殺しまでさせる気は無かった？ 汚い仕事はさせても、最後の

「一線だけは越えさせるつもりはなかった？　なんて言うなよ？」

ナイフを引き、背中側の鞘へと、ぐつとはめ込む。

「潜入調査って名目のスパイが欲しかったんだろ？　情報を流すだけで殺しをやらせるつもりはなかった？　違うな、あんたは結局、俺が殺しに慣れていくのが辛いんだろう？」

続いて銃を抜き、弾層と予備のマガジンを確認する。

さらにジムは、ダッシュボードから、勝手に弾を持ち出しにかかった。

サムは吐き出すように、重く、答えた。

「ああ……、そうだ」

サムは本音を持ち出した。

「市民として登録されていないお前なら……、確かに誰を殺したって罪には問われんよ。ジムなんて人間は存在してないんだから。存在しない人間を捕まえることはできない。だがな、お前は許せるのか！？」

「……前を見てろよ」

「自分を許せるのか！？」　美幸に会わせる顔があるのか？　答える

！

「復讐なんかじゃない」

「じゃあなんだ！」

「懂れだった」

「なに？」

道が混んできている。朝の通勤ラッシュが始まりつつある。

サムはちらちらと横を向く。しかし俯いたジムの顔はよく見えな

い。

「白い家、幸せな家族、すすくと育っていく赤ん坊……。あんたは俺の理想だった」

ジムは背筋を伸ばすように仰向いた。
ばさりと髪が後ろへ流れる。

「だから……、許せなかったんだ」

カートリッジを戻し、スライドさせて弾を装填する。

その目は、銃に宿っている死だけを見ている。

「……幸せを壊して、のうのうと生きてる奴らが許せなかった」
ゆっくりと前を向く。

グリップを両手で握り、銃口を額に当てて祈るようにジムは目を閉じた。

「……結局、お前の勝手な想いでやったことだと言っただな？」

「そうだ」

ジムの口から、熱い息と共に、復讐の言葉が吐き出された。

「美幸のためなんかじゃない。俺から美幸を奪ったあいつらを、俺は絶対に許さない」

ジムは呪いを掛けるように、ゆっくりと全てを思い出していった、忘れかけていた感情を。

サムに、初めて美幸を抱かせてもらった時のことを。

ホームレスの自分だと遠慮した。だがサムも、彼の妻も、ジムは家族だからと許してくれた。

とても小さな命だった。

だのに、まだ赤ん坊だというのに、命は溢れてこぼれていた。
落としかけて、笑い声が上がって、泣き出されて、慌てて。

それでもだあだあと……。

（そうだ、思い出せ！）

市民もホームレスもなく、無邪気に、等しく愛してくれた幼い少女を。

（思い出せ！）

ジムの瞳から、優しいものが、くしけずられていく。

（俺は、奴らを、許さない）

ジムはホルスターに銃を戻した。

BULLET：8

山中の材木置き場にヘリが待機していた。

報道用のヘリにカモフラージュしてはいるのだが、助手席側の隅に大口径のライフルが銃身を覗かせている。

ローターが回転し、木屑を巻き上げて散布していた。

「ジムが来る、足留めを頼む」

「はい！」

三人ほどがライフルを持って散って行く。

それを見てから、スペンサーはヘリへと乗り込んだ。

誰も疑問には思わなかった。殺せ、ではなく、足止めと口にした彼の心理に。

そこには微妙な本音が見え隠れしていた。

タイヤの軋む音が耳に聞こえる。

「頼んだぞ！」

リーダーらしくない発破をかけて、スペンサーはパイロットに上昇を命じた。

蜘蛛の巣状のヒビがフロントガラスに刻まれた。

サムが急なハンドルを切る。

「きゃああああああ！」

少女達は伏せたまま、遠心力によってシートの上を転げ回った。

どれが自分の手だか足だかもわからなくなるほどに絡まって。

「ジム！」

ターン中に、ドアを開けて飛び出していった。

「無茶を！」

車が半回転したところで、サムはアクセルを踏んだ。尻を晒して遁走にかかる。

「おじさん！」

「パパ！」

「ダメだ！」

バックミラーで撃ち合いを確認できた。

切ってしまうほどに唇を噛んで、サムは車を遠ざけた。

ジムはコートの前を合わせ、腕を曲げて頭を庇った。

そのまま身を低くして突っ走る。

バスバスと何発か当たった。しかし防弾仕様のコートは、衝撃だけを体に伝える。

懷から銃を抜き、曲げた腕の隙間から銃口を覗かせ、適当に撃つ。しかしその様に身を庇いながらでは、狙いも雑になってしまう。

相手もそれをわかっているからこそ、材木の影に隠れもしない。

（奴は何処だ！？）

ジムは、手短な木材の山に身を潜めた。

走りながら、一通り目にした景色を、頭の中で反芻する。

積み上げられた材木の山、砂砂利、プレハブの建物に、トラック。思い浮かべて、敵がどこを守ろうとしているか、当たりをつける。が、その思考を遮る爆音が轟いた。

「ヘリ！？」

空を見上げると、低空をかすめるように、警察のヘリが通り過ぎていった。

降下しかけたところで、何かを見つけ、追いかかったようであった。

ジムは勘を働かせた。

舌打ちをする。警察が追ったのは、空を飛ぶ何かか、地面を走る物だと想像ができたからである。

なら、スペンサーは、それに乗っているだろう。

「くそっ！」

自棄になったジムの真近くに、敵からの銃弾がプレゼントされた。

「もつと寄せろ！」

ムツキは、ライフルを構えながら、パイロットを叱り付けた。ヘリに乗っていたのはムツキであった。

警察のヘリは、対空戦を行えるようにはできていない。

ムツキは、安全を無視してドアを開けた。

速度の都合で、抵抗が凄く、ヘリはバランスを失い、姿勢を崩す。

「空中戦なんて、無理ですよ！」

パイロットが泣き言をわめく。

「閉めて下さい、落ちたいんですか！」

「やって見なきゃだろ！ まだ一発も撃ってないんだ、横寄せろ！」
「車じゃないんですから！」

ムツキは無視して、特製のゴーグルを目にかけた。

その内側は特殊なディスプレイになっていて、ライフルのスコアと光ファイバーケーブルによって繋がれている。

風速や距離なども表示されていた。コンピューターが自動的に、対象とするものを捉えて、照準位置を補正していく。

絞るように、引き金の指に力を入れる。

「うわっ！」

急にヘリを傾けられて、慌ててトリガーから指を外す。

「どうした！？」

「撃って来ました！」

「そりゃそうだろ！？」

だが、突然として、正面のガラスにヒビが入れば、それは焦りもするだろう。

割れたり、銃弾が飛び込んで来なかったただけでも、運が良かった。ムツキは毒づきながら、銃を納めた。

「やっぱ無理か」

「当たり前でしょう!？」

ムツキが諦めてくれたことにほっとして、機体を遠ざけながら、パイロットは漏らした。

「何処へ行く気ですかね？」

「知るか！」

「……あのへりなら、海を越えられるでしょうね」

「伊豆諸島へ渡る気か？」

低空で飛ぶへりを追跡できる様なシステムは警察にはない。

それに、途中で船にでも乗り換えられたら、また厄介なことになる。

伊豆沖の島には、ホームレスとも違った、独自のコミュニティが存在しているのだ。

例えば列島に戻ってくれたとしても、ムツキたちが持っているのは、ジャパンでの捜査権である。

中国、ロシアの監督支配地域へと入り込まれたら、彼らには諦めるほか結論がなかった。

「厄介な……」

上からの捜査打ちきり予告が、聞こえてくるようだった。

「その前に墜とおす！」

「だからどうやって!？」

「知るか! とにかく逃がすんじゃない! 絶対に追い詰めてやる!」

パイロットの溜め息よりも、ムツキの鼻息の方が荒かった。

BULLET:9

枝道から、跳ねるように車が飛び出す。

アスファルトにタイヤの跡を擦り残し、車は公道へ乗り入れ、加速をかけた。

必死の形相でハンドルを操りながら、サムは上空を通り過ぎていったへりを横目に追っていた。

（警察？ ロインの奴、余計なことを）

シートの間から真美が身を乗り出して訴えた。

「おじさん戻って！」

だが何かを思い詰めているらしいサムは、真美の声など雑音程度に聞き流した。

真美は身を引いて、後部の窓に張り付いた。

車はどんどんと遠ざかる。そこに居るはずの誰かを置き去りにして。

（こんなのってない！）

不条理の一言が思い浮かぶ。

車内に残る嫌な、焼けた肉の臭いが、ジムの凶行を思い出させる。傷口を溶接するような、痛みに対する無頓着さ。

そんなものが、どうすれば生まれ出るのか理解できない。

そのような、理解できない生き方をしてきたのが……。

「ジム……」

ルームミラー越しに見た、銃口へと祈る彼の姿が蘇ってくる。

（違う、あんなの、ジムじゃない……）

真美はそんなジムと、誘拐事件の時に瞳をのぞき込んでくれたジムとの間に、気妙なズレがあると感じていた。

あの優しい目をした人を狂わせる何かとは、何なのだろうか？
だから、尋ねる。

「ねえ……」

真美は尋ねた……美幸へと。

「市民権って……そんなに良いものなの？」

本当にわからなかったのだ。

生まれたときから当たり前のように持たされていて、そんなものの存在など確認したことすらないのだから。

美幸は……迷うように視線を漂わせた後で、コクリと頷いた。

「なかったら……」

美幸は俯いて、前髪を垂らしてで顔を隠した。

「なかったら、あたしたちは、野良猫以下だもん」

そこには、凄まじいまでの実感が込められていた。

「……ゴミを漁って、自動販売機やお店を荒らして、追い立てられて……それでもしないと、生きていけないって」

「だからって……」

美幸は怒りを込めて吐き出した。

「でもそうしないとっ、ジムが好きでやってると思ってるの!？」

『美幸ちゃん』みたいに殺されちゃう子が……、真美だってそうな
ってたかもしれないのに! あたしだって」

えつぐと、しゃくり上げる。

「『美幸ちゃん』を、殺してる……」

ぐつと詰まる、何も言い返せなかった。

加奈子という子が、美幸として存在することで、本物の美幸の存在は無かったものになっている。

もし本物の美幸が生きていたなら? その子が帰ってきたなら、
彼女はなんと言っただろうか?

実の父母ですら、代替え品を娘として扱っているのを見て、娘は
行方不明になっっていないと、なかったことにしているのを見て、
なんと口にするだろうか?

真美とて、本当なら昨夜の内に、殺されていたかも知れなかった。
そうならなくてすんだのは、ジムのような不正規の存在があった
からだ。

代わりに怪我をして、させられている人間が居たからだ。

美幸は語る。

「あたしたちなんて、蚊やゴキブリと同じだよ……うつつしくて
も、見逃してくれる？ うざったいって、追い払うでしょ？ 叩く
でしょ？ ……殺すでしょ？」

同じ生き物ではないのと言う。

「お風呂にも入ってないような、臭いだけでむせて吐きそうになる
人を抱きしめられる？ 遠ざかるでしょ？」

だったらと言う。

「同じ『人間』として、見てもらえるように、しないと……」

真美を見る。

「真美が、ジムに、どうしてって思うのって、ホームレスに見えな
いからでしょ？ あたしにだって、そうは思わないのは、あたした
ちが、同じ人間に見てもらえるようにしてるからじゃないの？」

だから、悩んでくれるんでしょう？ と、彼女は問うた。

——人間って、なんだろう？

真美はそんなことを考えた。

実際、そうだろうと思ったからだ。ジムが守ってくれた。助けて
くれた。

優しくしてくれた。だからこそ、彼のことが気になるのだろう。

これがただのホームレスであつたなら、どうだろうか？

銃で撃ち合い、ナイフで斬り合う。ホームレスとはそういう人た
ちなのだと思うのなら、いなくなれば良いと思うのではないのだろ
うか？

迷惑だと、怖いと思うのが普通だろう。

（ママ……、心配してるかな）

唐突に、思い出す。

ほんの脅しだと、小遣い稼ぎだと騙されて、乗せられたのだとい
う母親のことが。

小遣い稼ぎに、狂言誘拐を企み、父から大金をせしめようとした

母。

どれだけ平和ボケをしているのかと問いたくなる。
だがそれが、美幸の言う、市民権を持った人間なのだと、気がつ
いた。

（なにをしたって、昨日と同じ今日があつて、今日と同じ明日が来
るって、なんの保障もないのに信じられるようなゆとりがあるから、
そんなことだつてできちゃうんだ……）

必死に生きていないから。

がむしゃらに生きる必要もないから。

狂言誘拐すらも、日々の刺激程度に思えるのだろつ。

保護や保障を与えられ、なんの不安もなく生きている。

なにもなくなりはいしない、失うことはない。

そんな信仰を支えているのが……。

（市民権）

沈黙が満ちる。それを打ち破つたのはサムへの連絡であつた。

「……わかつた」

携帯電話を胸ポケットへとしまい込む。

「……まだ、なにかあるの？」

真美は恐いながらも尋ねた。

ここまで来ては、もう無関心ではいられなかった。

サムは重苦しく吐息をこぼした。

「……旧東京湾沿岸に浮かんでいたタンカーが動き出したらしい。

奴らは街を火の海にするつもりだ」

真美はゾッと青くなった。

『おかげでもつとヤバい計画が』

スペンサーが口にした、意味のわからなかった皮肉について思い
出す。

「そんな!？」

「テロリストを気取つたって、奴らは素人の集団だからな。世間に
訴えるとかなんとか、くそ！やる事が極端なんだよ!」

サムの焦りに、真美は掠れた声を出した。

「そんな……、嘘でしょ？」

「嘘なもんか」

サムは真実味を持たせるために声を抑えた。

「もうあと何時間か後には、旧東京湾岸部は火の海だ」

「け、警察は……」

「……警察は『手順』があるから即応できない。今頃沿岸警備隊との折衝で泡食ってるだろうな」

「どうしよう……、どうしよう!？」

だから……という。

「……あいつに頼るしかない」

サムはそう言って車をターンさせた。

「きゃ!？」

真美は、倒れ込んできた美幸に驚いた。

「美幸？」

顔面蒼白、その上で、美幸は己の体を抱いて震えていた。

「また……、まだお兄ちゃんに」

「ああ」

サムは娘に対しても容赦が無かった。

「人殺しをさせたくないなんて、確かに偽善だったな……」

それがどういう意味なのか？

美幸の憤りを真美が奪う。

「だったらっ、州兵とか、だつて!」

ジムでなくても——その希望は碎かれる。

「本国の指示で動きやしないさ」

「どうして!？」

「中露への警戒で精一杯だからな」

「そんな!」

真美の頭の中に、先程の血で塗れ合う二人の様が蘇って来た。その身に刻まれた深い傷。

あのような事……、今度はもっと酷いことになるかもしれない。
なによりも、知り合いが、あの優しい目が、くすんでいく、歪んでいくのは、恐怖であった。

「だめっ、そんなの！」

「あのなあ」

サムは先程逃げ出した脇道に車を入れた。

「……湾岸大火災が起こったら、どうなると思う？」

「どうって……」

真美が思い浮かべたのは、炎の海に沈む街だったが、サムが言っているのはそういうことではなかった。

「……ジャパン政府は、この街を切り離すぞ」

もっと大きな、それは政治的な対処であった。

「湾岸部……水没指定の立ち入り禁止区域に一番多く住みついているのはホームレスだ。だが政府は、公式にはホームレスの存在なんて認めてない。けどな、そこに居る以上、火災が起きれば死傷者が出る。もしかすると、その中には市民権を持っている人間がいるかもしれない。となれば、見分けが付かない以上は、全ての負傷者を収容しなければならぬし、死者も回収しなければならない」

それがどれだけの作業となるのか。

どれほどの資金が必要な作戦となるのか。

搾取を受け入れるという屈辱に耐えてまで、日本は身売りをしたのである。

「そんな金、どこから出すっていうんだ。人道支援とか、災害対策とか、そんなものは金と余裕があるからできることだ。それがないジャパンって州は、この街をまるごと捨てるぞ。州都を移動して、あとは知らんぷりだ」

もつとも……と続ける。

「首相は、その状況を利用するかもしれないがな。湾岸部は土地の沈降と海面上昇で見放された封鎖区域がほとんどだ。そこで火災が起こったところで、死ぬのはホームレスが大半だ。再開発もやりや

すくなる。州都を移動した上で、真つ新に……」

「そんなつ、お父さんはそんなこと！」

「ホームレスを見捨てるような真似はしているのに？」

あまりにも痛烈だったかもしれないが、真美を黙らせるには十分な効果を持っていた。

「この州だけが、知事制度を取ってない理由がわかるか？」

唐突に話題を取り替える。

「責任を取らせるためさ」

「え？」

「首相はそのための首にすぎない。この州の政策について、決定は全て本国の議会で行われている。首相はただのお飾りだ」

「嘘……」

愕然とする。

選挙で選ばれた代表である……、と当然のように思っていたからだ。

（選挙？）

はっとした。

選挙権を持っているのは、誰なのかと考えて……。

想像をする。テレビで勝手な事を言っていた、評論家、批評家達……。

的外れな父への総括。

父は、それらに対し、軽く突っ込み、笑っていた。

だが裏を知ると笑えなかった。そんな父に対する批判や応援の中には、姿の见えない亡霊のような彼らの声は反映されていないのだから。

ぞわぞわとする。

父は、彼らの意見について肯定も否定もしていたが……『彼ら』とは誰のことだったのだろうか？

父は、ホームレスという存在を、勘定に入れた言葉を口にしていただろうか？

市民とホームレス。どちらの人口が多いのかはわからない。

だが選挙は『市民』だけで行われ、父は有権者に対する言葉だけを耳に入れていた。

それはどうしてなのだろう？

「同情はできるさ。本国が本当に欲しいのは橋頭堡^{きやうづつぽう}なんだ。米軍を駐屯させるための巨大な基地だよ。ジャパニーズなんてどうだって良い。もし本国の切り離し政策が行われたら、この州は本当に駄目になる。だから本国へと、税金という形で貢がなきゃならん。有益だと示さなきゃならないんだ。そのためにはホームレスなんて無一文の連中のことなんて考えてはいられんさ。想像して見る。明日からは君も、君の友人も、その周りの人間も、テレビの向こうの連中だって、みんな一斉にホームレスになる。そんな未来が来たらどうなると思う？」

一切の庇護を失うのだという。

「今までホームレスを毛嫌いしていた連中が、今度はホームレスになるんだよ。認められると思うか？ そんな風になることを。これまでぬくぬくと生きて来た連中が、そうなってしまったとして、これも現実なのだと認めて生きていくことができると思うか？」

そんな混乱を避けるためにはと説明する。

「現状を維持し続けることが最低限必要なんだよ。そのためにはホームレスのことなんて気にしてられんさ。お飾りはお飾りなりに頑張ってるってことだよ。良心を削って、本国に尻尾を振って、右と左、守れる方だけを選んで守ってる」

だからこそ、と。

「首相は、全てを台無しにする道は選ばない。選べない。この列島の三分の一を任されている人間として、その十分の一以下の面積を守るために、終始することなんてしない」

高潔だという。

「俺が知ってる君の父親はそういう人だ。もしそんな道を取れば、自分の首がどうなるかなんて考えるまでもない。それでもやる。き

つとな。けど」

顔をしかめる。

「見捨てられた連中がどうなるか……」

捨てられる街に取り残される人間がどうなってしまふのか。

「ホームレスは、君たちピープルを憎んでる。うらやんでる。もしそんなことになったりしたら、連中は、ここぞとばかりに狩りの獲物にするだろうな、新参者を。今まで自分たちのことを、よくも……ってな」

「……真美もだよ？」

美幸の押し殺した声に、真美は素直に頷いた。

「真美のパパの仕事が無くなっちゃったら」

「わかってる……」

真美と美幸は、お互い俯きながら視線を交わした。

もしそのようなことになったりすれば、真美はどちらの側にも居られなくなってしまうだろう。

虐げる政策を取ってきた人間の娘として……。

最悪の選択をした男の家族として……。

BULLET:9 (後書き)

何回書き直しても、会話が破綻してる気がする(´・ω・｀) 大丈夫かな

BULLET:10

派手に銃声が鳴り響くのだが、もっぱら撃っているのはテロリストたちであつた。

ジムはじつと潜んで、相手の出方を窺っていた。目を閉じて、静かに呼吸をくり返している。

早かつた呼吸が落ちついていくにつれて、一度に吸い込む量が多くなつていく。

ふうふう……、と深く吐いて、ジムはようやくまぶたを開いた。地を蹴り駆け出し、銃声の元へとまっしぐらに押し迫る。

両腕で顔を庇う、脇と、腹に着弾を感じたが、それはよろけさせるほどのものでも無かつた。

フルメタルジャケットでも無い限り、彼のコートが撃ち抜かれることはない。

それでも複数の射線が集まつて、ジムの体をめつた打ちにした。コートを通して響く衝撃に、スプenserによって刻まれた傷が疼き出す。

しかし、その傷のことを彼らは知らない。

ジムが手負いであることなど気付いても居ない。

むしろ、鬼気迫る様子が、彼らの恐怖心を強く煽つた。

迫られる者にとつて、恐怖そのものであつたろう。

幾ら弾丸を撃ち込んでも、決して倒れない男など。

「あああああああ！」

票的にされた男が、ジムの突撃を体に受けて、一緒にたに転がつた。

恐ろしさの余りそれでも引き金を引くのだが、カキンカキンと無情なノック音が響くだけであつた。

逆光の中、ジムの瞳と振り上げられたナイフの刀身が、鋭く閃く。
(どうして!?)

男は弾を撃ち出してくれない銃に、裏切りへの呪詛を吐いて、死亡した。

プレハブの建物は事務所だろう、他にトラックとライトバン、ワゴンボックスカー、積み上げられた木材などが場所を閉めている。

「ジム！」

ジムはピラミッド状に積み上げられた木材の上で、うなだれていた。

自分の足を見つめたままで、顔を上げようとしなかった。

「ジム？」

真美と美幸は、不審なものを感じて足を緩めた。見上げるような位置で立ち止まり、ピクリともしないジムの顔を恐る恐る覗きこむ。「心配するな」

そんな二人の肩をポンと叩いて、サムは山を登った。

「モルヒネを使ったな？」

ジムの顔がゆっくりと上がる。

虚ろな瞳は、焦点が合っていないかった。

「……奴は逃げたのか？」

サムは囁くように問いかけた。

「スペンサーだよ」

その一言に、目に光が戻り出す。

「奴は……」

問いかける声にサムは頷いた。

「伊豆方向らしい、警察無線を拾った」

「海……」

「海軍が所属不明のタンカーを見付けた、もうすぐ東京湾に入る」
そこで一度、サムは話を途切れさせた。

「……大丈夫か？」

「大丈夫？」

どこか心を遊離させたまま、ジムはくつくつと笑い始めた。

「大丈夫？ ああ、大丈夫さ……」

「どこがだ」

呆れるサム、しかしジムは立ち上がる事で返事にした。

「おっと」

よろけたジムを咄嗟に支える。

「ふう……、いいか？ やつらはタンカーを東京港にぶつけて火の海にするつもりだ」

「火の海……」

「そうだ、二十年前の悪夢を自力で再現するつもりだ」

「二十……、二十年、二十年前？」

「そうだ」

その年こそ海面上昇によって、東京地盤の液化化が一度に押し進んだ年だった。

日本はそれまでの過剰な税政策とあいつぐ失敗に対するツケから抜け出せず、それでもなお海面上昇と地盤沈下に対して、それまでの様に迅速な処理などとは程遠い政治を展開していた。

調査委員会の設置から予算の捻出、地方への首都移転作業が始まる迄には実に五年もの時を無駄に費やし、その間、じりじりと進む水没を見過ごした。

東京から逃げ出す人々は増加の一途を辿った、が、首都圏に居住していた多くの他人に無関心な人種には、そうなっても頼るべきつてなどどこにもなかった。

地方もまた、そのような身勝手な人種を寛大に受け入れられるほど寛容では無かった。

軋轢からの混乱が巻き起こり、衝突は大きな破壊を招いた。略奪などが日常化したのである。

もちろんこれを收拾する努力は地方自治体に委任され、国はなんの手出しもしなかった。

結果的に株価の暴落などと相まって、経済復興支援と言う名目で

介入した米国を主体とする多国籍軍が、分割統治を行う運びとなったのである。

こうして二十年前に、米国第五十一州ジャパンが誕生する運びとなったのである。

「覚えてるだろう？ 五才だったお前はあの街でなにをしていた？」
地盤沈下による高層ビルの倒壊、汚染物の流出による病気の蔓延。捨てられた犬や猫が、置き去りにされた老人や子供を食い殺していた。

そして太った犬猫、ネズミを人がむさぼり食らっていた。
スラム化していく街には、逃げ出す市民とは逆に、行き場を失った者達が流入した。

この街の秩序が彼らを『ホームレス』として切り捨てる事で回復するまでに、実に二十年もの歳月をかけてきたわけである。

切り捨てていなければ、保証の名の元に莫大な予算を割くこととなり、共に破綻していた事だろう。

サムは思う。

（しかし結局は、どこかで無理が浮き彫りになるんだ）

その被害者の一人がここに居るし、自分の娘も、今の娘もそうだった。

「スペンサーは……」

どこにいるのかと、ジムの鋭い目が問いかける。

「……タンカーと合流するつもりだろうな」

「海上保安部は？」

「最悪の場合にはタンカーに大穴を開けて、海を火事にしても止めるつもりだ」

「わかった」

言葉を重ねることに、口調がはつきりとしていく。

サムはもう一度だけ確認をした。

「大丈夫なのか？」

「……モルヒネと一緒にブドウ糖と栄養剤を打った、少し飛んでた

みたいだな」

「無茶をする、その内ショック死するぞ？」

「かまうもんか」

ジムはサムを押しつけて、自分の足で跳び下りた。

「くっ……」

無理をして真っ直ぐに立ち、目眩いを感じて前へとよろける。それを慌てて支えたのは美幸だった。

「……美幸？」

涙目のまま、ギュツと唇を噛んで足元を見ている。

「すまない……」

そっぴうんだったら……。

謝るくらいなら……。

もうやめてって言っても……。

美幸の口腔に、様々な言葉がぐつと詰まった。

一度に溢れ過ぎて、どれも口にする事が出来なかった。

（え？）

ふつとジムの体重が軽くなって美幸は驚いた。

「真美？」

反対側の肩を、真美が持ち上げていた。

脇の下に肩を入れて、男一人を支える二人。

美幸は真美の気難しそうな横顔を見つめた。

「……まだ、お礼してないもの」

真美は呻いた。

「助けて貰ったの……、二度目だから、だから」

真美は言う。

「今度……、デートでもなんでもしてあげるから」

俯いた真美の頭を、くしゃつと撫でる手があった、ジムだ。

肩を借りながら、それでも腕を曲げて、彼女の頭に乗せていた。

美幸に向けるような、またあの晩に真美に見せたような、そんな目をしていた。

「行くぞ」

そんな三人をサムが促した。

「いったん街に戻る。二人の保護を警察に頼んだら軍のヘリだ」

「軍の？」

「ボス戦だ……、出し惜しみしてる場合じゃないだろう？」

「そうだな」

支えを潰さないように歩き出すジムに苦笑を見せる。

「……ムツキが無茶してなきゃいいが」

サムの独り言が耳に入った。

BULLET: 11

「降ろせって言うてるだろ、なんで遠ざかるんだよ！」

窓にべったりと張り付いて、ムツキは降下していくヘリに歯ぎしりをした。

巨大なオイルタンカーが、速度を落として、ヘリを迎え入れようとしている。

デッキにはまばらに人影が見えた。どれも銃を持っている。

深緑色の海は、真上からでは平坦に見えて、スケール感を狂わせる。

「降りろってんだよ！ でなきゃ跳び下りるぞ！！」

「やってくださいよ、勝手に！」

ヘリの着艦に合わせて、タンカーが速力を上げ始めた。

「あれにどうやって降りろってんですか！？」

パイロットが悲鳴を上げる。

「向こうのヘリはちゃんと降りただろうが！」

「じゃあなんであつちのに乗らなかつたんです！」

「ヘリ飛ばすだけでも税金使ってた！ 犯人捕まえなきゃ、なに言われるかわかんねえだろ！」

ムツキは怒鳴りながらも、座席の下や背もたれの後ろを漁るように、がさごそとやり始めた。

「ちっ、何もないのかよ、このヘリ……」

見つかるものと言えば、予備のショットガン程度である。

「ナパームぐらいつんどけよ」

げっそりとする。

「警察のヘリになに期待してるんです」

「ライフルとショットガン、それに予備の弾……。お、催涙弾あるじゃねえか」

やたらと大きな弾を見つける。

「マスクと、防弾チョッキもあるな？」

「ええ」

「お前も着ろ」

「ええっ!？」

勘の良いパイロットは嫌な予感に襲われた。

「突入する気ですか!？」

「ヘリを下ろすだけでいい、船内ハッチに取りつくまで盾になってくれ」

「嫌ですって!」

「早くしろ!」

チョッキを着込んだムツキは、強引に操縦桿を奪い取った。

代わりにチョッキを押し付ける。

「レバーは俺が持つてやる!」

「もう!」

その場の勢いと言うものかもしれない。パイロットの彼は、本当にレバーを預けてチョッキに腕を通した。

マジックテープだ、体の前面で重ね合わせるように止める。

すぐさま操縦桿を取り返し、深呼吸一つで下方にあるタンカーを見据えた。

「いいですか! タッチアンドゴーで行きますよ!」

「わかった!」

「行きます!」

レバーを押し込む、ヘリは急降下爆撃機のような勢いで突っ込んだ。

「ひゃーっほあ! 騎兵隊ってこんな感じだよな!」

「知りませんよ!」

何処か楽しそうな返事に苦笑する。

(結構ノってんじゃないか!)

ギリギリの機首が引き揚げられる。ゴンという震動は、パイプが何かに足の当たった音だろう。

「グッドラック！」

「幸運がありやあ、こんな国に生まれてねえよ！」

ニヤリと笑って、ムツキは跳び下りた。三メートルほどの落下で、着地の際に足が痺れたが、そののんびりとはしていられなかった。

チュンと、真近くて銃弾が跳ねたからである。

それを皮切りに、集中砲火がムツキを襲う。

「くそ！」

駆けながら、隠れられそうな場所を探す。五メートルほど先にタラップがあった。

警察のヘリの外装甲は、基本的に防弾使用となっていた。が、ガラスはそうはいかない。

撃たれてひび割れが走ったように、防弾効果は薄いのだ。

所詮はヘリである。装甲車のように盾となれる堅さはない。

それでもムツキのために、敵を追いつ散らそうと、滞空してくれていた。

（無理しやがって！）

「おおおおっ！」

恐怖からつい声が出てしまう、ムツキは身を低くして駆け抜けた。右手にライフル、左手には催涙弾の詰まったごつい銃、ショットガンは肩にかけている。

フル装備だった。

「早いつて！」

ヘリが上昇して逃げにかかった。善意で残ってくれていたとはいえ、やはり文句は出てしまう。

タラップの後ろにハッチがあった。しかも開け放たれていたので、ムツキは迷わず飛び込んだ。

「ていつ！」

シュポン、シュコンと間抜けな音を立てて催涙弾が転がっていく。簡易マスクとゴーグルのセットを着けて、突入する。白い煙の中、船員たちがうめき声を上げて転がっていた。

「そこだ！」

ムツキは何の躊躇もなくライフルを撃った。ゴーグルのために視界は悪いが、通路は広くない。

避けようもなく、肩や足に銃弾を受けて、赤き陽の昇る国の構成員は転がった。

これがただの船員であつたなら？　ムツキはそんな事を考えてかぶりを振った。

奴らは銃を持っていた、と。

「さてと」

換気の都合で、ガスの薄れは早かった。

もう視界は晴れ出している。

「……こういう時、大將はブリッジに居るもんだって、相場は決まってるんだよな」

ムツキの計画はずさんであつた。

「で、ブリッジってどう行くんだ？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9081x/>

HOLSTER 空薬莢

2011年11月3日03時11分発行